

## 新体操の個人競技における構成上の一考察

— 開始と終末のポーズを中心に —

### A study of the composition on individual competitions in rhythmic gymnastics

— through start and final poses —

上原真奈

Mana UEHARA

#### Abstract

##### Objective :

The objective of the present study was to analyze the start and finish of each event in rhythmic gymnastics and ascertain elements of performances that have strong impacts on judges and audiences, to serve as references for designing future performances.

##### Methods :

Subjects were the top ten individual finishers at the 1999 World Rhythmic Gymnastics Championship. Starting and finishing positions and poses were analyzed, and a total of 40 performances on VCR were viewed by 26 students studying rhythmic gymnastics and 30 students studying modern dance at the Japan Women's College of Physical Education to survey impressions on starting and finishing movements.

In most performances, the back section of the exercise floor was used in the beginning of the routine, while the front section of the exercise floor was used at the end. With regard to the composition of these performances on the exercise floor, highly expressive movements were performed more at the end of the routine than the beginning. The overwhelming majority of performances ended with the performer poised low, knees touching the exercise floor. In other words, after tossing equipment high in the air and completing a major trick, most performers remained low to recover the equipment. Very impressive starting and finishing movements included original poses requiring a great deal of flexibility and poses that emphasized power movements. As far as finishing movements were concerned, the strongest impressions tended to be associated with the more difficult tricks. Movements that led to the final pose immediately after a major trick were particularly effective.

These findings suggest that performances containing the following elements will prove effective : a strong finish ; highly expressive movements in the front section of the exercise floor during the latter part of the routine ; reception of equipment in a low pose after completing a major trick ; and a finishing pose emphasizing power or flexibility.

**keywords :** *rhythmic gymnastics, the start and finish, pose, impression*

## I. はじめに

新体操は、体操競技やフィギュアスケートと同様に、審判員により評価され点数化される採点競技である。洗練された動き、鮮やかな手具操作により、音楽と動きの融合の中で豊かな表現を生み出すスポーツであり、動きの可能性を追求し、技術面における難度、優美さ、審美さ、かつダイナミックな要素を鑑賞する、いわば「動く芸術」である<sup>1)</sup>。

新体操の演技の開始は、審判員や観客への第一印象  
日本女子体育大学（教務補助員）

である重要な部分であり、これから展開されるであろう演技の内容までも予想させ、また、終末においては、演技の集大成である同じく重要な部分である。クライマックスを伴う、いわば、演技の見どころと言っても過言ではない。

世界のトップの選手における演技の開始動作と終末動作は工夫がなされ、同じ動作をしている選手は皆無で、その選手個人の特徴がよく表されている。

新体操の個人競技における構成の多様性に「空間的要素」があり、さまざまな方向（前方・後方・側方・斜め方向）・床上の移動・空間レベル（低・中・高の位

置)の使用がある。演技の開始・終末の構成や空間における位置付けは、演技の印象を強める要因として重要であり、それは演技の良否を決定づける重要な部分であると考えている。野田高梧は「シナリオ構造論」において、ファースト・シーンについて次のように述べている。「ファースト・シーンは、目的に向かって躊躇なく真直ぐに出発すべきもので、何等の予備的説明その他の道草などを食って迂回してはならない。作家の選んだ劇的内容が、クライマックスに於いて火花を発するならば、ファースト・シーンはその口火なのである」<sup>12)</sup>。新体操の演技の開始についても、ファースト・シーンは、審判員又は観客への第一印象となり、その演技の傾向や性質までも予感させるものである。また野田は結末について次のように述べている。「元来、脚色という仕事の一つの目的は、テーマを説明することにあるともいえるのだから、その意味で、テーマは成るべくシナリオの前段、少なくとも劇がクライマックスに達する以前に、その方向を明示し、それが証明しつくされると共に劇もまた終わりを告げるように計画せらるべきである」<sup>12)</sup>。また江口隆哉は、「劇的なものの如何にかかわらず、クライマックスは、外側からとってつけるものではなく、内面的な帰結でなければならない」<sup>5)</sup>。クライマックスは、その強調された緊張感が緩むとともにアンティ・クライマックスと呼ばれる下り坂に向かい、結末が来るものだといわれている<sup>12)</sup>。「『下り』は短い程よく、今更ここまで来て長々と描写することは、解決を急ぐ観衆の期待を裏切るもので、却って全体の統一を妨げることにもなる」<sup>12)</sup>。言い換えれば、それだけクライマックスが演技の終末に位置付けられているということである。新体操の個人種目の構成を「導入－展開－まとめ」と3つに分けるとするならば、終末は、まとめの部分にクライマックスがあり、そこから終末(終末のポーズ)へつながる重要な部分であるといえる。

本研究では、1999年第23回世界新体操選手権大阪大会の個人種目を研究対象とし、演技の開始と終末に焦点をあて、印象の強い演技構成とは何であるかを調べ、今後の新体操個人競技の演技構成のための参考資料として、また指導を行う上での一指標として活用したいと考える。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

1999年新体操世界選手権大会(大阪)で行われた個人総合決勝に出場した上位10名(各4種目)の選手を対象とした。演技開始位置と終末位置と移動図を記録し、演技の開始と終末の位置とポーズについて分析した。またどのような演技の開始と終末が、見る側に強い印象を与えるかを調査するために、日本女子体育大学新体操部26名とモダンダンス部30名に、前述の世界選手権大会個人総合上位10名(各4種目)の演技を、選手の名前及び得点を表示せず、氏名をA~Jとし、試技順通りにVTRで見せ、開始と終末の印象調査を行った。

### 2. 分析方法

新体操フロア13m四方のフロアを100分の1に縮小した、縦横13cmの紙面を9等分区割り図にし、演技開始点と終末点と移動図を記録した。なお調査場所は正面客席中央部とした。

1999年世界新体操選手権大会においては、写真・ビデオ撮影が禁止されていたため、全大会を収録した市販のビデオを使用し、フロアの移動図の確認、また技の難度等の記述をした。

### 3. フロア区分と各表現度について

フロア区分は江口隆哉の「舞踊創作法」、小浜理佳の「新体操の演技構成における一考察」により9区分とし



図1. 9区分フロア 位置の名称  
( )内は略称

8	5	9
6	2	7
3	1	4

審判員席

図2. フロア区分表現度強度順

(図1), 表現度強度順を図2に示した. 区分の性格はルース・クライン著「演出入門」の, 「区分による6つの性格」に準じてフロア区分の表現度強度順とした.

### III. 結果及び考察

区分の性格は, 前部・中部・後部の中央部の力が強く, 上手よりも下手側が強い印象を与える, と述べている<sup>9)</sup>. 上手と下手の印象の違いを, 芸術史家ウェルフリンは次のように指摘している. 彼によると, 絵は左から右へ読まれ, 左下から右上への対角線の方向は上昇的で, 左上から右下への対角線は下降的であると指摘した. 絵の右側にあるものは, どのようなものでも重く見える. ガフロンによると, 観察者は絵をみるとき, その左側をみるものであり, 左にかかれた絵はすべて最大の重要性をもつ, といっており, これは劇場のステージに関するディーン<sup>10)</sup>の観察と一致している<sup>11)</sup>. 芝居の幕があくと, 観衆はステージの左手を最初に見るものである, と述べており, 舞台の左手は力の強いところと考えられる(図2).

「新体操女子規則」によるとフロアを十分に使用することが規定されている. よって, 片寄った空間構成をすることは出来ない. しかし, 印象度の強い位置を上手く使用することにより, 演技面での起伏が見られ, 高得点を得ることが出来ると考えられる. そこで, 新体操は, 審判員がフロアの前に座り前方から採点するという点から, 舞踊や演劇における場合と同じ表現の強さを示すものとして今回の分析に図2の表現度強度順を使用することとした. よってフロアの中央前が最

も強い表現を持つ区分になり, 上手側より下手側の区分の方を, 表現の強い区分とした.

#### 1. 開始と終末

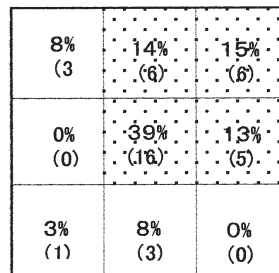
##### 1) 開始位置と終末位置

演技の開始位置と終末位置について, 行われる位置によって見る側に印象を与える力の相違があると考えた. そこで, 演技の開始時と終末時がどこで行われているかを調査した(表1, 図3-1, 図3-2). フロア9区分の名称は略称で記す(図2を参照).

表1はA~J選手の各演技の開始と終末の位置を示

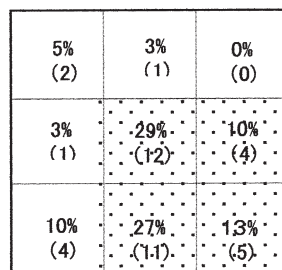
表1. 各演技の開始位置と終末位置

種目 選手	演技開始				演技終末			
	ロープ	フープ	ホール	リボン	ロープ	フープ	ホール	リボン
A	UL	C	UL	C	DC	C	UR	C
B	DR	DC	UL	SL	DC	C	DC	DC
C	C	SL	C	UL	DC	C	DC	SL
D	UC	UR	SL	C	DL	UR	C	UC
E	SL	SL	UL	C	DC	DR	DL	C
F	UC	C	UL	C	DC	C	DC	C
G	UC	UC	UC	C	DL	DC	SL	C
H	C	C	C	C	DR	SL	DC	C
I	UR	DC	C	UC	C	DL	SL	SR
J	UR	C	DC	C	DR	DR	DL	C



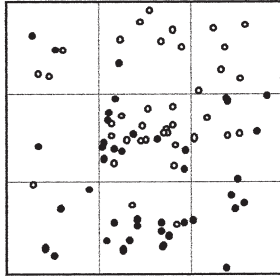
審判員席

図3-1. 開始時の位置の割合  
( )内=人数



審判員席

図3-2. 終末時の位置の割合  
( )内=人数



(白：開始，黒：終末)

図4. 開始と終末の位置

したものである。図3-1, 3-2は, 各選手の開始時と終末時における使用位置を割合で示した図である。

図4は, 演技開始と演技終末位置の使用分布図である。

開始位置は, フロア中心部より後方部からの使用が多い事がわかる。従って表現度の弱い位置からの開始が多いことがわかった。終末時は, フロア中心部より前方部への使用が多いことがわかる。従って表現度の強い位置での終末が多いことがわかった。

図4を見るとわかるように, 演技開始位置はフロア中心部より後方部からの使用が多く, 演技終末位置はフロア中心部より前方部での使用が多く, 比較した結果大きな差がみられた。

また, 各演技者の開始と終末位置において, 演技開始位置の表現度より, 終末位置の方が表現度の強い位置であった演技は, 40演技中31演技であった。結果より, 演技の開始位置を弱め, 演技終末を強める演技構成であるといえる。

## 2) 開始位置からの移動

開始において, 中央部より後方部での使用が多いことから, 表現度の弱い位置から次の動作の移動, 方向はどうであるか, 表現度6以上, すなわち, 江口隆哉の9区分による表現度強度順の弱い位置でのフロアの

使用を対象に, 次に移動した位置の表現度の強弱を調査した。一例として図5に今大会1位であった選手の移動図を示した(表1, 表2, 図2, 図5)。

各開始位置から表現度の強い位置へ移動していたのは40演技中16演技であった。開始位置が表現度6以上の弱い位置での使用は, 40演技中14演技あり, そのうち9演技(64%)が各使用した位置よりも表現度の強い位置へ移動していることがわかった。弱い位置から強い位置へ次の動作の強弱を強調しているといえる。

F選手(本大会1位)のロープとボールのフロアパターンを例としてみると, ロープにおいて, 開始はUCで表現度は5に対し, 終末はDCで最も表現度の強い区分に位置していた。ボールにおいては, ULと最も弱い位置での開始であり, DCである最も強い位置での終末であったことから, 開始と終末時の表現度の差があるフロアパターンとなっていた。

個人種目10選手(各4種目)の演技で使われた, 開始時の位置と終末時の位置において大きな差があることがわかった。演技開始において39%の割合でフロアの中心部を使用しており, ULが15%, UCが14%と後

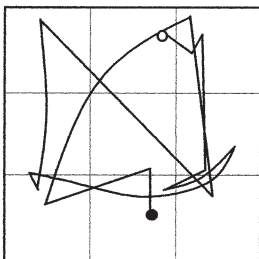
表2. 開始位置及び終末位置の移動が表現度の強い方向であったもの

選手	ロープ		フープ		ボール		リボン	
	開始	終末	開始	終末	開始	終末	開始	終末
A	○	○			○	○		○
B		○				○	○	○
C			○	○		○	○	○
D	○		○	○	○	○		
E		○	○	○	○	○	○	○
F	○	○		○		○		
G	○	○	○	○	○	○		○
H		○		○		○		○
I		○				○	○	○
J	○	○		○		○		○

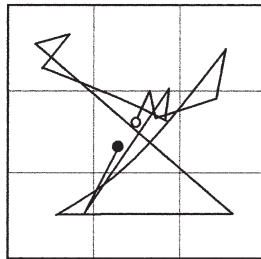
○=表現度の強い位置へ移動

■→江口隆哉による表現度6以上の弱い位置

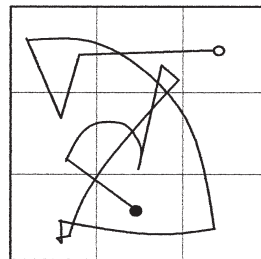
## F選手(本大会1位)



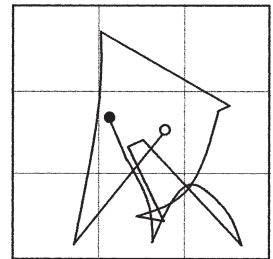
ロープ



フープ



ボール



リボン

図5. 開始位置からの移動図

方部からの開始が多い事がわかった。フロアの表現度強度順を見ると、中心部は印象の強い位置(C)であるものの、ULは9区分の中でも一番表現度は弱く、UCは中央ではあるが審判員から離れた奥の方で、決して表現度の強い位置からの開始ではない。しかし、弱い位置からの開始は、表現度の強い位置に64%の選手が進出しており、弱い位置から強い位置へと、次の動作を強調するため、より強い印象を持たせるために行った構成方法ともいえるのではないかと。

逆に演技終末時において見ると、一番表現度の強い位置のDCと2番目に強い位置である中央部において、29%の割合で使用しており、反対に一番表現度の弱いULの上手奥においてはどの演技の終末時にも使用されていないことがわかった。終末時全体の使用位置を見ると、前方部での使用が多い事がわかった。

そして、演技開始位置の表現度が弱い場合、次の動作は表現度の強い位置へ移動する傾向があり、また、演技開始位置よりも演技終末の表現度が強い位置の演技構成が、40演技中31演技と多いことより、クライマックスを伴う「まとめ」の部分において、表現度の強い位置に演技構成がなされていると言える。

### 3) 開始と終末ポーズ

A~J選手各4種目の演技の開始と終末において、どのようなポーズをしているかを江口による動きの表現度より分析した(表3-1、表3-2、表3-3)。

フロアの空間にそれぞれ性格があり、表現度に差があるが、動きそのものにも表現度がある。

江口隆哉は動きの表現度に関して「視線を観客に向けるか、向けないかによっても、ずいぶん表現度の強さにちがいが出てくる。視線などのごく些細な部分でも、使うか使わないかによって、視線は、踊りにひきつけられたり感銘を覚えなかったりする。顔も身体も、正面をきった動きが強い。まぶたを上げて視線を正面向きにすれば最も強い。それにひきかえて、うつむいた動きや、横向きまたは後ろ向きの動きは弱い。身体においては、顔と胸が主役ともいべきものであるから、この両方が正面に向いていれば強い。次には、顔と胸のどちらかが斜め、または横を向いたときが強い。例えば、胸は前向きのままで、顔だけが斜め、また、横を向いた場合は、顔も胸も両方も斜めまたは横を向いた動きよりも強い。特に後姿は淋しい。顔も胸も、真後ろを向いてしまえば、表現度は非常に弱くなる」と述べている<sup>9)</sup>。演技の開始のポーズと終末のポーズにおいて、表現度の高い動きをする事により、より見

る側への印象を強める。1分30秒という短時間の中で自己の表現は、動き一つ一つに重要性があり、開始と終末のポーズにおいて表現度の高いポーズにする必要があると考えられる。

#### ① ポーズの向きについて

##### a. 正面に働きかけているポーズ(斜め方向を含む)

開始ポーズでは、40演技中30演技が正面に働きかけているポーズを行っていた。終末のポーズでは40演技中30演技が正面に働きかけているポーズを行っていた。

##### b. 横向きのポーズ

開始ポーズでは40演技中5演技が横向きからのポー

表3-1. 各選手のポーズの働きかけている方向

選手	種目	ポーズ(方向)	
		開始	終末
A	ロープ	正面(上手向き)	正面
A	フープ	正面	正面(下手向き)
A	ボール	正面(上手向き)	正面(下手向き)
A	リボン	正面(下手向き)	正面(下手向き)
B	ロープ	正面(下手向き)	正面
B	フープ	正面(下手向き)	正面
B	ボール	正面(下手向き)	正面
B	リボン	正面(上手向き)	正面(上手向き)
C	ロープ	正面	正面
C	フープ	正面	正面(下手向き)
C	ボール	正面(下手向き)	正面(下手向き)
C	リボン	正面	正面(下手向き)
D	ロープ	正面(下手向き)	正面(上手向き)
D	フープ	正面	正面
D	ボール	正面	正面(下手向き)
D	リボン	横(下手側)	正面
E	ロープ	正面	正面
E	フープ	正面(下手向き)	正面
E	ボール	正面(下手向き)	横(下手側)
E	リボン	正面	正面
F	ロープ	横(上手側)	正面
F	フープ	正面	横(上手側)
F	ボール	正面(下手向き)	正面
F	リボン	横(上手側)	正面
G	ロープ	正面	正面
G	フープ	正面	うつ伏せ(下手側)
G	ボール	正面	うつ伏せ(下手側)
G	リボン	正面(上手向き)	正面(下手向き)
H	ロープ	後ろ向き	横(下手側)
H	フープ	横(上手側)	うつ伏せ(上手向き)
H	ボール	横(上手側)	正面
H	リボン	正面	正面
I	ロープ	後ろ向き	横(下手側)
I	フープ	後ろ向き	後ろ向き
I	ボール	正面	正面
I	リボン	後ろ向き	横(下手側)
J	ロープ	後ろ向き	正面(上手向き)
J	フープ	正面(上手向き)	後ろ向き(上手側)
J	ボール	正面	正面(上手向き)
J	リボン	正面	正面



表3-2. 開始終末の各ポーズの総数

開始	演技数	ポーズの方向
正面	30	真正面16, 上手向き5, 下手向き
横	5	上手側4, 下手側1
後ろ向き	5	
終末		
正面	31	真正面18, 上手向き4, 下手向き
横	5	上手側1, 下手側4
後ろ向き	2	真後ろ1, 上手側1
うつ伏せ	3	上手向き1, 下手向き2

表3-3. 膝突きポーズ及び終末での低い姿勢で手具を受けた選手

膝突きのポーズ			
開始	18	終末	39
		低い姿勢での手具の受け	22
(演技数)			

ズであった。そのうち2演技は柔軟性を生かした（横向きになった時に最も効果的なポーズ）ポーズであった。終末のポーズでは40演技中5演技が横向きのポーズであった。そのうち1演技は同様に柔軟性を生かしたポーズであった。

#### c. 後ろ向きのポーズ

開始ポーズでは40演技中5演技が後ろ向きからのポーズであった。うち3演技が立ちのポーズであった。終末のポーズでは後ろ向きのポーズは40演技中2演技であった。

#### d. その他

終末のポーズでは、他にうつ伏せでのポーズが3演技のうち1演技が上手向き、2演技が下手向きであった。

### ② ポーズの向きについて「上手」「下手」の分析

開始ポーズでは、40演技中9演技が「上手」に働きかけているポーズ、10演技が「下手」に働きかけているポーズであった。終末ポーズでは40演技中7演技が「上手」に働きかけているポーズ、14演技が「下手」に働きかけているポーズであった。「真正面向き」のポーズは、開始ポーズは40演技中16演技、終末ポーズでは18演技であった。「真後ろ向き」のポーズは、開始では40演技中5演技、終末では、1演技であった。

上手方向へ働きかけているポーズより、下手方向へ働きかけているポーズのほうが多いことがわかった。上手位置にいる選手は下手方向へ働きかけるポーズをする、つまりフロアの空いている場所への働きかけが多いのではないかと考える。ルース・クライン等は下手を重要視しているが<sup>2,8,26)</sup>、これら40演技は、フロアの

上手側を多く使用し、ポーズの向きを下手へ働きかける事で、空間のバランスを取っているように考えられる。なお、例外が3演技あり、終末ポーズをDLに位置した選手2名、SLに位置した選手が1名いた。いずれもURから長い斜線を描いており、ダイナミックに移動をし、その動きの流れを生かしたまま、上手向きにポーズをした振り付けであったと考える。

### ③ 姿勢のポーズについて

開始ポーズでは膝つきの低い姿勢のポーズで開始する演技は40演技中18演技であった。終末のポーズでは40演技中38演技であった。また終末に行われた技において低姿勢での「受け」が22演技あり、22演技全てがそこからすぐにポーズへ導かれていた。

開始のポーズと終末のポーズにおいて正面方向へ働きかけるポーズは、強い印象づけとして有効であると考えられる。上手方向及び下手方向においては、下手側のほうが強い印象を持つとされている。下手方向へ働きかけているポーズが上手方向より多いことにより、印象度の強い方向へ働きかけているポーズが多いと考えられる。横向きのポーズは10演技中3演技が柔軟性を生かしたポーズが行われていた事から、ポーズを強調するために有効な方向であると考えられる。後ろ向きのポーズは、開始において4演技中3演技が立ちポーズであった。背中をみせ、そこから正面へと動きだすことは、一気に強い表現へ移行する演出として有効な方法であるといえる。終末ポーズにおいて、低姿勢のポーズが多く、38演技中22演技がポーズまでの動作に「投げ」「受け」の技が取り込まれていた。終末での技において、手具の「受け」が移動の出来ない低姿勢で行うことにより熟練度が試されることになり、審判員、観客に緊張感を与えることができる。この演技が成功すれば高い評価が得られることから、終末においては、膝つきの低姿勢のポーズが多いと考えられる。

## 2. ビデオ鑑賞による開始と終末の分析

新体操部とモダンダンス部において、印象を強く受けた演技の開始と終末がほぼ一致しており、開始よりも終末に印象を強く受けていた。半数以上の人々が、A選手、C選手、E選手、F選手、G選手における意見が集中していた。

印象がほぼ一致していたことより、新体操部とモダンダンス部とを総合したものを分析した。また印象度の強かった演技の開始と終末位置、ポーズについて分

表4. 開始と終末のアンケートによる印象度（強い順）

選手	手具	開始		選手	手具	終末	
		全体	全体			全体	全体
G	ボール	44	78.6	C	ロープ	50	89.3
A	フープ	43	76.8	F	リボン	50	89.3
A	ボール	42	75.0	F	ボール	49	87.5
F	フープ	40	71.4	C	ボール	48	85.7
F	リボン	40	71.4	E	ボール	48	85.7
F	ロープ	39	69.6	G	ボール	48	85.7
F	ボール	38	67.9	G	ロープ	43	76.8
E	ボール	37	66.1	C	フープ	42	75.0
E	リボン	37	66.1	C	リボン	37	66.1
G	リボン	36	64.3	F	フープ	37	66.1
A	リボン	35	62.5	A	リボン	36	64.3
G	フープ	35	62.5	B	フープ	36	64.3
J	ボール	33	58.9	E	ロープ	36	64.3
H	ロープ	31	55.4	B	ロープ	35	62.5
C	ボール	30	53.6	E	フープ	35	62.5
C	ロープ	29	51.8	E	リボン	34	60.7
E	フープ	29	51.8	G	リボン	34	60.7
H	ボール	29	51.8	J	フープ	34	60.7
C	フープ	28	50.0	D	ロープ	31	55.4
G	ロープ	28	50.0	G	フープ	31	55.4
J	リボン	27	48.2	I	ボール	31	55.4
E	ロープ	26	46.4	B	ボール	30	53.6
C	リボン	24	42.9	A	フープ	28	50.0
B	フープ	23	41.1	H	リボン	24	42.9
H	リボン	22	39.3	A	ボール	22	39.3
I	ロープ	22	39.3	B	リボン	21	37.5
H	フープ	21	37.5	D	フープ	21	37.5
D	ボール	18	32.1	F	ロープ	21	37.5
D	ロープ	17	30.4	H	ボール	21	37.5
I	フープ	17	30.4	J	リボン	21	37.5
I	ボール	17	30.4	D	ボール	20	35.7
A	ロープ	16	28.6	I	リボン	20	35.7
I	リボン	14	25.0	H	ロープ	19	33.9
J	ロープ	13	21.4	I	ロープ	17	30.4
B	ボール	12	21.4	J	ボール	15	26.8
D	フープ	11	19.6	I	フープ	12	21.4
B	ロープ	9	16.1	A	ロープ	9	16.1
D	リボン	9	16.1	J	ロープ	8	14.3
J	フープ	9	16.1	H	フープ	7	12.5
B	リボン	6	10.7	D	リボン	3	5.4

\*新体操 26名 モダンダンス 30名 計 56名

\*数値は、左側が実数（人）右側が割合（%）

■ →35名以上（62.5%）

析した結果、次のことわかった（表4、表5）。

開始より終末に印象を強く受けている回答が多いことより、開始より、終末に印象づけさせる要素が取り込まれている。つまり、終末のほうが重要視される演技構成が成されているといえる。

印象度の強い演技の開始位置は、中央部から後方部への使用が多く、Cを除いては表現度の弱い位置からの開始であった。表現度の弱い位置からの開始においては、すぐに印象度の強い方向へ移動するという結果が得られているため、表現度の弱い位置から強い位置へ、抑揚のついた構成とされていた。ポーズにおいては、正面方向へ働きかけるポーズが多く、横向きのポーズに関しては、高度の柔軟性を表したポーズであることから、正面を意識した、表現度の高いポーズを行う傾向があった（過度の上体の反り等）。終末においては、演技の集大成である終末の構成を、表現度の高い位置で行い、審判員を意識した終末であるといえる。ポーズにおいては、正面へ働きかけるポーズが多く、横向きのポーズにおいては、高度の柔軟性を表したポーズであった。

アンケートで印象を強く受けた要素として挙げられたのが、「ポーズ」と「大技」である。ポーズに関して、強く印象を受けていたA選手、E選手、F選手において一致していったことは、柔軟性を生かしたポーズを行っていたことであった。特にF選手に関しては、高度の柔軟を伴ったポーズを行っていたことから、印象を強めたといえる。またC選手においては力強さの感じられるポーズに印象を受けていたことから、力動感（ダイナミズム）のあるポーズは観客に強く印象を与えるものと考えられる。

また終末において、F選手のポーズ自体に、印象を強く受けたのに対し、他の選手の終末においては、大技

表5. 印象度の強い演技の開始終末の開始位置とポーズについて（上位10名）

選手	種目	開始位置	ポーズ(方向)	選手	種目	終末位置	ポーズ(方向)
G	ボール	UC	正面	C	ロープ	DC	正面
A	フープ	C	正面	F	リボン	C	正面
A	ボール	UL	正面(上手向き)	F	ボール	DC	正面
F	フープ	C	正面	C	ボール	DC	正面(下手向き)
F	リボン	C	横(上手側)	E	ボール	DL	横(下手側)
F	ロープ	UC	横(上手側)	G	ボール	SL	うつ伏せ(下手側)
F	ボール	UL	正面(下手向き)	G	ロープ	DL	正面
E	ボール	UL	正面(下手向き)	C	フープ	C	正面(下手向き)
E	リボン	C	正面	C	リボン	SL	正面(下手向き)
G	リボン	C	正面(上手向き)	F	フープ	C	横(上手側)

により、強く印象を受けていることがわかった。難しい技であり、緊張感のある技であればあるほど、強く印象づけられており、技によってクライマックスを持たせ、ポーズへ導く終末が、見る側は強く印象を受けていることがわかった。表現度の強いポーズでの終末が、見る側に印象を強めた要因であったことが言え、終末に行うポーズとして有効であることがわかった。

#### IV. まとめ

本研究は、新体操個人演技の開始と終末の時空間における演技構成を調査し、どのような構成が審判員及び観客に強い印象を与えるかについて考察し、今後の指導や演技構成に資することを目的とした。1999年世界新体操選手権上位10名の個人演技の分析から、次の結果が導き出された。

1. 技の開始位置と終末位置においては、フロアの使用位置に差が見られた。開始位置は、中央から後方部での使用が多く表現度の弱い位置であったが、逆に終末位置においては、中央部より前方部での使用が多く表現度の強い位置へ移動して最後のポーズとなっているものが多かった。
2. ポーズは、開始終末共に、正面方向へ働きかけるポーズや、下手方向へ働きかけるポーズが多かった。また終末においては、膝つきの低姿勢のポーズが多く、中でも大技の「受け」から終末のポーズとなるものが多かった。
3. ビデオ鑑賞による開始と終末のアンケート分析では、開始終末ともに、独自性を有する柔軟性を表したポーズに印象を強く感じており、また、終末においては、ポーズまで導かれる動作の難度が高く、成功するかどうかと観客が注目するような緊張感を伴った大技であるほど強い印象を受けており、更にそれが終末のポーズに近いほど印象を強く感じている事がわかった。

開始終末において、どのような構成が有効的であるか、次のことが示唆された。

開始位置において、表現度の弱い位置からの演技は、そこから強い表現度の位置への移動をしている構成となっていることや、終末では、中心部より前方部である表現度（1～4の強度）の強い位置の使用の多いことから、1分30秒の演技の中で、このような空間構成をすることが、クライマックスを伴う重要な部分である終末を強調するための有効な方法

であると示唆された。

開始ポーズにおいて、独自性のあるポーズ（難度・特に柔軟性を生かしたポーズ）を行う事が印象を強める上で重要であり、更に表現度の強い方向へ働きかけるポーズ（正面方向へ働きかけるポーズ、柔軟性などの体形が明確に表せる向き）を行う事が印象を強める要因である。終末のポーズも開始と同様に、独自性を持たせ、表現度の強い方向へ働きかけるポーズと共に、力動感（ダイナミズム）のあるポーズが印象を強く与えることが示唆され、低姿勢での緊張感のある大技の「受け」の成功から導き出されたポーズが印象を強く与えると示唆された。開始よりも終末に力を入れた振り付けを行うことで、終末のクライマックスに重みを持たせることができると示唆された。

#### 引用・参考文献

1. アルンハイム(1981) 美術と視覚 美と創造の心理学上. 美術出版社. pp18-19.
2. アルンハイム(1983) 美術と視覚 美と創造の心理学下. 美術出版社.
3. 舞踊教育委員会(1994) 舞踊学講義. 大修館書店.
4. グニツァ・フェルロヴァー, ヘレナ・リヴォロヴァー(1984) 新体操の基礎. ベースボール・マガジン社.
5. 江口隆哉(1961) 舞踊創作法. 株式会社カワイ楽器. pp103-109. pp113-114. p225.
6. 石崎朔子(1986) 図説 新体操の基本. 株式会社新思潮社. p10.
7. ジュリエッタ・シシュマノヴァ(1978) 新体操への道: 美の表現を目指して. ベースボール・マガジン社.
8. 加茂佳子, 関田史保子(1983) 美と躍動の世界: 新体操の世界の技術. 講談社.
9. 松本千代栄(1957) 舞踊美の探究: 舞踊理論と指導法. 大修館書店.
10. Jastrjemskaia, Turi Titov(1957) Rhythmic Gymnastics Hoop・Ball・Clubs・Ribbon・Rope. Human Kinetics.
11. 日本体操協会(1998) 新体操女子規則. pp57-58. p74.
12. 野田高梧(1991) シナリオ構造論. 宝文館書店. pp166-175. p190. p191.
13. 小浜理佳(1994) 新体操の演技構成における位置考察: 個人競技. 日本女子体育大学大学院.
14. ルース・クライン(1954) 舞台文庫第8 演出入門. p 5.

(平成13年9月21日受付)  
(平成13年12月20日受理)